

「三国各霊塔」

一宮町東河内の本谷川と中坪川の合流点近くに架かる才樫橋北西の県道の傍らに、二基の豪壮な石碑がそびえています。向かって右側が「三国各霊塔」、左側が「故焼山久吉氏頌徳碑」と呼ばれるものです。今回は、このうち「三国各霊塔」について紹介します。

「三国各霊塔」は、旧・染河内村の田中政右衛門氏が、日清戦争に際して、日本・中国(当時は清国)・韓国(当時は朝鮮国)の三か国の戦没兵士の霊を弔うために、自らの財産を投じて建立したものです。

日清戦争は、明治二十七年(一八九四)の夏から、明治二十八年(一八九五)の春にかけ、主として朝鮮の支配を巡って戦われた日本と清国との



「三国各霊塔」(右)と「故焼山久吉氏頌徳碑」(左)

戦争です。

郷土や国を愛する気持ちの強かった田中政右衛門氏は、この日清戦争の期間において新聞で戦況を知るところを心がけ、毎日のように庭田神社に参拝し、戦勝を祈願していたとい

います。ある夜、多くの兵士たちが向かいの萩野山において奮戦し、多くの死傷者が出た夢を見て、一念発起し戦死者の冥福を祈ろうと思ひ立ちました。同時に敵国とはいえ、中国・韓国の兵士も自分たちの国に報いようとする志に代わりはないとして、ともに忠魂の碑を刻むことを決心したものです。

時に明治二十九年(一八九六)、同じ染河内村出身の法学士である伊藤俊介氏(のち、明治三十六年(一九〇三)、衆議院議員となる)に相談し、飯尾松之進氏を介して釈雲照律師に石碑の題字を依頼しました。律師は、その義挙に感動し、日本・中国・韓国それぞれの国に殉じた兵士の霊を祀るべく、「三国各霊塔」と名づけました。

正面の題字の揮毫(書を書くこと)は、枢密顧問官で陸軍中将の鳥尾小弥太子爵、建立の由来を記す碑文の作成を探検家で中国の事情に詳しい岡本監輔氏に依頼し、碑文の揮毫は中国の少白陳の手になっています。碑文は格調の高い純漢文で綴られ、書体も流麗な隷書体で記されています。



「三国各霊塔」碑文

石碑は本谷川の川石を用いることとし、明治二十九年(一八九六)の夏に工事を開始しましたが、田中政右衛門氏は工事半ばの明治三十年(二八九七)の秋に病の床につき、後事を子息らに託し、氏の意思は引継がれることとなりました。

堂々たる石塔の完成の除幕式は、明治三十一年(二八九八)四月十八日、観音寺の住職を導師とし、穴粟郡内の寺院の住職ら各界名士など多数の参列のもと、盛大かつ厳粛に行われました。

石塔建立にかかる工費は、田中氏が自己の田地を売ってあて、その他地元有志の奉仕や寄附もありました。このように地域の一住民によって行われた正義感溢れる行動は明治時代にあつては他に類がなく、三国の和平を祈念する時代に先駆けけた偉大な事績といふべきでしょう。

(参考資料『一宮町史』)
社会教育文化財課

編集後記

今年度から広報担当になりました、です。

私は昨年まで出身地である長野県で生活をしていました。縁あって穴粟市に引っ越してきて半年ほどしか経っていない穴粟市初心者です。まだまだわからないことだらけですが、自然豊かでおいしい食べ物や楽しいイベントがたくさんあるこの地にとっても魅力を感じています。休日に、道の駅や各地の観光スポットに出かけることが今のマイブームです。おすすめの観光名所や穴場があれば、ぜひ教えてください！

また、広報の担当として、地元の皆さんにはもちろん、私のような他の地域から来た人にも、穴粟の魅力を存分に伝えられるよう頑張りますのでよろしくお願い致します。